

# ヴィクトリア朝理想の女性像へのジョージ・エリオットの挑戦

—『フロス河の水車場』のマギーの場合—

吉 村 工 理

## 女流作家として

ジョージ・エリオット (George Eliot 本名 Mary Ann Evans メアリ・アン・エヴァンズ 1819–1880) は、「今ではヴィクトリア朝小説家のなかでディケンズ (Charles Dickens) と比肩しても遜色ない地位に立つまでに至っている」<sup>1</sup> 作家の一人とも言われている。しかし、彼女が生きたヴィクトリア朝時代は、女性が作家を職業とすることが容易ではなかった。

エリオットが作家としての人生を歩むこととなったきっかけには、ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes) が関係している。1852年頃から彼女は、哲学者、歴史学者、ジャーナリスト、批評家、演出家であったジョージ・ヘンリー・ルイスと恋仲になり、やがて同棲生活を始める。道徳律の厳しいヴィクトリア時代にあって、妻帯者である彼との同棲は、センセーショナルな出来事であった。彼女の小説家としての素質を見抜いていたルイスは、ドイツ滞在中に彼女に小説を書くように薦め、メアリ・アンは1856年9月頃から処女作『エイモス・バートン師の悲運』("The Sad Fortunes of the Reverend Amos Barton") を執筆し始める。当時の女性作家は二流以下と考えられており、女性作家というだけで無視される風潮があった。それを考えて、メアリ・アンはジョージ・エリオットと男性のペンネームを使用した<sup>2</sup>。女性作家が活躍することが困難な時代にあって、エリオットは男性の仮面をかぶり、作家として自己表現の道を選んだのである。

## エリオット文学の特徴—『フロス河の水車場』の位置づけ

エリオットが小説を書く上で目的としていた重要なことの一つは、平凡な人間の経験をありのままに描き、読者の共感を喚起することであった<sup>3</sup>。エリオットは、多くの作品で高尚な目的を持ち、自己実現を目指すヒロイン達を登場させ、彼女達がヴィクトリア朝の道徳や社会規範と葛藤する様子を描いた。三つの短編からなる『牧師たちの物語』(Scenes of Clerical Life, 1858) で小説家としてデビューしたエリオットは、長編小説『アダム・ビード』(Adam Bede, 1859) が話題作となり、大きな注目を集め。『フロス河の水車場』(The Mill on the Floss, 1860, 以下『フロス河』) は『アダム・ビード』に続く二作目の長編小説である。この作品は、エリオットの書き残した長編・中編・短編計12作品の中で、極めてエリオット自身の人生に近い小説である<sup>4</sup>。ヒロインマギー・タリバー (Maggie Tulliver) と兄トム (Tom) との軌跡には、エリオット自身がルイスとの関係において体験した兄アイザック・エヴァンズ (Issac Evans) との確執が投影されていているといわれている<sup>5</sup>。『フロス河』のヒロインマギーを通して読者は、エリオット自身の人生経験が感得出来るといえるだろう。次に『フロス河』のあらすじを紹介する。

### 『フロス河の水車場』

ヒロインのマギーはドールコート水車場 (Dorlcote Mill) の主、タリヴァー氏 (Mr. Tulliver) の娘として兄トムと共に両親の愛を一身に受け、美しい自然の中のびのびとした少女時代を過ごす。しかし、いわゆる金髪、青い瞳の Fair な女性とは正反対の、黒目、黒髪<sup>6</sup>で不器量な外見、女の子にはふさわしくない知性、衝動的な性格であった彼女は、母方のドドソン家 (Dodson) の伯母達から異端児とみなされてきた。物語は、そんなマギーの幼少時代に始まり、水車場の水利権をめぐる訴訟の敗北に伴う一家の破産、その破産の原因となつた宿敵ウェイケム (Wakem) の息子フィリップ (Philip) とマギーの交際、從

姉妹ルーシー（Lucy）の婚約者スティーヴン（Stephen）との関係から生じたトムや社会規範との摩擦に苦しむマギーが、結末でトムと共に洪水で不慮の死を遂げるまでの葛藤する日々を描いている。

### 先行研究における『フロス河』

多くの先行研究が、マギーが絶対視していたものは、第二の父親とも言える兄トムに象徴される「過去」また「家庭」であると指摘する。川本静子は、『フロス河』はマギーの「過去」との絆の復活により、マギーの精神的再生が可能となると主張する<sup>7</sup>。また教養小説的に読むならば、マギーを表現するキーワードは、「禁欲」「自己犠牲」であり、彼女は道徳的決断を迫られながら「過去」への忠誠を守り、自己認識に達すると解釈できる<sup>8</sup>。一方、フェミニズム批評では「性的役割が確立した世界」の中での男女の関係が作品とテーマとも指摘され<sup>9</sup>、スザン・グーバー（Susan Gubar）は、主にマギーとトムの間で生じる葛藤について論じ、結末でマギーが兄を救おうとしてともに水死するのは、抑圧者である兄に対する無意識の復讐と解釈している<sup>10</sup>。また、ジョシュア・ディー・エスティー（Joshua D. Esty）は、マギーは、性と権力の伝統的、近代的な協定の間にあるはっきりしない位置に属しており、小説においてあらゆる方法で社会の網を打ち破ろうと試みると述べている<sup>11</sup>。

確かにマギーにとってトムは、断ち切ることの出来ない絶対的な存在であり、フィリップ、スティーヴンとの関係を諦める第一の要因であるのだが、彼女の男性達との関係を検討してみるとヴィクトリア朝時代の女性の理想像を打破し、それを超越する試みであった可能性が示唆される。そこで本論は、フェミニズム批評の指摘する「性的役割」を生み出したヴィクトリア朝の女性に押し付けられた理想像とマギーの行動を比較しながら、『フロス河』が「回帰」ではなく「反抗」の試みであったことを検証してみたい。

## ヴィクトリア時代理想の女性像

ヴィクトリア時代、女性は、男性よりも知力の面でも弱いことが求められ<sup>12</sup>、ヴィクトリア文化は「性を抑圧するピューリタニズムであり、性に向かってとりすました淑女ぶり・お上品主義」<sup>13</sup> であった。女性達には、尼僧のようなつましさ、道徳的清純が求められ、「情熱なき女」はヴィクトリア朝には支配的なイデオロギーであった<sup>14</sup>。ピーター・コミノ (Peter Cominos) は、男性と女性の間の性の扱われ方の違いについて論じ、性への目覚めは、女性にとって“innocence”が美德とされていたヴィクトリア朝社会には家庭や社会の目指す所と相反するために、抑圧されなければならないと考えられていた<sup>15</sup>と述べる。

また女性達には、“The Angel in the House” 「家庭の天使」、つまり家庭において、自己犠牲と献身によって、夫を支え、子供達を慈しみ、召使を統べる賢い女主人の役割を果たすべきという理想が求められた。職場と家庭の完全な分離、対立を背景としたヴィクトリア朝社会の家庭神聖化の精神風土により、家庭は愛を絆とする人間関係の維持が唯一可能な精神的オアシスとしての場となつた。そして女性は、家庭において魂の浄化をもたらす天使の役割を付与された<sup>16</sup>。

また、「家庭の天使」は性的魅力とは無縁の、肉体をもたない存在として「生殖のための性」に終始させられ、「快楽のための性」からは切り離された<sup>17</sup>。コミノも「結婚して魂も、肉体も、財産も全て夫に渡すヴィクトリア朝の女性らしい女性は、エゴに欠けており、義務と sexuality の葛藤に陥ることはない」<sup>18</sup>ことを主張する。

このように、ヴィクトリア朝の女性達には、性的に抑圧され、家庭という枠の中に閉じ込められたか弱い “innocent” な天使であるべきという理想が押し付けられていた。本論文ではマギーがこれらの概念に対して反抗していく様子について考えてみたい。

## 知識への渴望—フィリップとの出会い

まず初めに、マギーとフィリップとの関係を通して、「知性」の問題について考える。

父親の意向で兄トムには、オックスフォード（Oxford）出身のステリング氏（Mr. Stelling）のもとでラテン語や数学などの教育が施される。ところが、兄よりも利巧でダニエル・デフォー（Daniel Defoe）の『悪魔の歴史』（*The History of the Devil*）やジョン・バニヤン（John Bunyan）の『天路歴程』（*The Pilgrim's Progress*）に興味を示すマギーに父は、“Too 'cute for a woman, I'm afraid”（15）とマギーは女の子としては賢すぎるため、成人した際にもそれが大きな足かせとなることを恐れている。

「知識欲」を十分に満たすことの出来ないことにマギーは、どのような行動をとったのだろうか。2部では、トムの学友として、ステリング氏のもとにフィリップがやってくるが、マギーは5章で彼と初めて対面することになる。

...she could not help looking with growing interest at the new school-fellow, ...and she was convinced now from her own observation that he must be very clever : she hoped he would think *her* rather clever too, when she came to talk to him (186)

トムから、フィリップの博学ぶりを聞かされていたマギーであるが、今彼を目の前にして、マギーはフィリップに対して興味を感じる。そして、彼女は自分自身の観察によって、彼が賢いに違いないと確信する。そして、マギーは、自分自身の知性を認めてもらうことを期待する。

そしてフィリップは、マギーのそんな願望を読み解くのだ。

he wished *he* had a little sister. What was it, he wondered, that made Maggie's dark eyes remind him of the stories about princesses being turned into animals? ...I think it was, that her eyes were full of unsatisfied intelligence... (187)

フィリップは、マギーの黒い瞳に見入り、動物の姿に変えられる王女の話を思い出すが、語り手は、それは、その中に満たされぬ知性があるからだと説明する。マギーにとってフィリップは、彼女が求めるものを理解してくれる存在なのだ。

このように家庭において十分に学ぶことを許されないマギーは、「知識」を与えてくれる媒体としてフィリップを見つけ出したのである。独力では男性に匹敵する教育を受けることの出来ないマギーは、フィリップの知性を見抜き、また一方自らも「満たされぬ知性」があることを訴えかけることによって、「知力の面で男性よりも劣っているべき」という観念を打破しようとするのである。

### 「お上品主義」の否定

こうしてフィリップとの関係を通して、家庭内では抑圧されていた知識を得ようとしたマギーであったが、少女から大人の女性へと成長していく中で、フィリップとの関係において新たな問題が発生してくる。

成長したマギーは、今度は「性」の問題に直面することになる。次にフィリップ及びステイヴンとマギーの関係を比較しながら、彼女の“innocence”に対する抵抗の試みについて考えてみたい。

家族の破産に伴い、フィリップと会うことがなくなったマギーであったが、5部1章で、茜が谷へ散歩に出かけていった彼女は、そこでフィリップと再会する。その時のマギーの様子が、以下のように説明される。

She put out her hand and looked down at the lower deformed figure before her with frank eyes, filled for the moment with nothing but the memory of her child's feelings—a memory that was always strong in her.  
(311)

フィリップの腰の曲がった身体を見たマギーは、子供時代の記憶で満たされる。また、家族の転落の原因となったウェイケムの息子であるフィリップとは

会うことは許されないと告げた時に、マギーがフィリップの顔に表われた表情を見る場面が以下のように描写される。

The deepening expression of pain on Philip's face gave him a stronger resemblance to his boyish self, and made the deformity appeal more strongly to her pity. (313)

フィリップの姿にマギーは憐れみを誘われる。つまり、マギーがフィリップに抱く感情には、女性が恋人に対して向ける愛情や *sexuality* を思わせるものではなく、あくまで子供時代への懐かしさや憐憫の情、また “as he always used to be, and like her to look at him kindly.” (309) と描かれていることからもわかるように、親切心といった自分よりも立場の弱いものに対して向ける慈悲であり、それはすでに幼い頃から表わされていたことが認められる。

つまり、マギーのフィリップに対して持つ感情は、恋人へ向けられるような性質を持っていない。松田英男は、フィリップを「身体的障害ゆえに資本主義社会の競争から除外され、男女の二元論の外に生きる傍観者」<sup>19</sup> と論じているが、フィリップとの関係は、性的な満足を得られないばかりか、マギーの「反抗」の試みにおいては単なる現実逃避でしかないのである。

## 「情熱なき女」への挑戦

ところが身体障害者であり、男性味に欠けるフィリップとは異なり、スティーヴンには性的魅力がある。そこで次にマギーの「情熱なき女」を理想とするヴィクトリア朝的女性像への反抗の試みとして、マギーとスティーヴンとの関係を見ていきたい。

6部2章で初めてマギーを目の当たりにしたスティーヴンは、その背の高い黒い瞳の妖精を見て、驚きを隠すことが出来ない。

For one instant Stephen could not conceal his astonishment at the sight of this tall dark-eyed nymph with her jet-black coronet of hair, the next, Maggie felt herself, for the first time in her life, receiving the tribute of a

very deep blush and a very deep bow from a person towards whom she herself was conscious of timidity. (391)

マギー自身も、人生で初めて、賛辞を向けられたことを感じるのである。このように二人は一目見た時からお互いに惹きつけられていく。

しかし、これ以後マギーは、スティーヴンに自分の心を見透かされるのを恐れ、必死で抵抗するかのように、彼に目を決して向けようとしない。そして彼女は、一貫して自制心を保とうとする。

ところが、6部11章で、マギーはスティーヴンへの思いをあらわにする。

He was looking eagerly at her face for the least sign of compliance; his large, firm, gentle grasp was on her hand. She was silent for a few moments, with her eyes fixed on the ground; then she drew a deep breath, and said, looking up at him with solemn sadness, ...

Don't urge me; help me—help me, *because I love you.*'

Maggie had become more and more earnest as she went on; her face had become flushed, and her eyes fuller and fuller of appealing love.

One kiss—and then a long look... (468–469)

スティーヴンの愛に答えることを避け続けてきたマギーであるが、ついにこの場面で彼女はそれを許してしまう。そして、最初は黙って、地面を向いていた彼女は、ついに耐え切れなくなり、スティーヴンを愛していることを告白してしまう。スティーヴンと恋愛関係になることに伴い、マギーはフィリップを裏切るだけではなく、スティーヴンと婚約しているルーシーへの背信、更にはその背信行為によって家族に不名誉をもたらすことでフィリップの時と同様、兄トムとの間に大きな溝を作ることになる。

家族とのつながりが重視され、自己抑制が求められ、自分のエゴを抑え、他人のために生きるのが女性の義務であった当時の社会にあって<sup>20</sup>、結婚前に婚約者以外の男性に対して愛の告白をすることは許されざる行為であった。しかし、マギーは、うちに秘められた情熱をあらわにし、「情熱なき女」という理

想を超越したのだ。

## 「男性への服従」の拒否—結婚制度の否定

このようにスティーヴンへの抑えきれぬ思いを告白したマギーであるが、無邪気なルーシーとフィリップへの思いと、何故二人を苦しめではならないのかという利己心の間に葛藤し、しばらくスティーヴンと会うことを避ける。ところが、ついに事件は起こる。ルーシーは、マギーとフィリップのために二人きりの船遊びを計画するのだが、事情を知らぬフィリップは、体調不良のため、スティーヴンに代理を頼んでしまう。そして、スティーヴンに誘われるがままに、マギーはボートに乗り、見知らぬ町へと来てしまい激しく後悔する。

...‘you *are* mine now—the world believes it—duty must spring out of that now—in a few hours you will be legally mine. And those who had claims on us will submit—they will see that there was a force which declared against their claims. A kiss—dearest—it is so long since’ (499)

スティーヴンとの逃亡は、マギーを聖オッグの伝統から連れさせる潜在的な道筋であるように思えるのだが、同時に彼女は、男性に支配される女性として自己を意識するという両義性を生み出してしまうのである<sup>21</sup>。“mine”、“duty”、“legally mine”と言葉から、スティーヴンが男性として、女性であるマギーを自分の所有物とし、法律によってマギーがその義務に縛られてしまうことが意味される。スティーヴンのこの言葉を聞いてマギーの瞳が恐怖で大きく見開く(499)様子がこの後に描かれ、ルーシーや他の人を不幸にして自分は幸せになることは出来ないことをスティーヴンに告げる。確かに、マギーがスティーヴンを拒否するのは、彼女自身が説明するように、過去の生活が自分にとって尊いものであり、そこに戻らなければならないという思いからなのであるが、彼女の言葉を見てみると、そこには他の理由が隠されているように思える。

It has never been my will to marry you—if you were to win consent from the momentary triumph of my feeling for you, you would not have my

whole soul. (497)

マギーは、スティーヴンと結婚しようと考へたことはなかったこと、そして一瞬自分が彼の言いなりになってしまったから、彼は自分を同意させたと思っているかもしれないが、自分は魂をスティーヴンのものにするつもりはないと言ふ。

これらは一体何を意味するのであろうか。マギーのこれらの言葉は「結婚」という法律により妻としてスティーヴンに縛られることを恐れ、好意に答えることで、男性に自分の魂をも渡してしまうことを拒否するという姿勢が表われた主張といえる。

スティーヴンを拒否する時の彼女の言葉は、結婚によって女性達の置かれる状況に対する抵抗を思わせる。スザン・フライアーマン (Susan Friarman) は、男性主人公であるトムにとって、結婚が人生のゴールとなっていないことを述べているが<sup>22</sup>、結婚が女性にとって安全な道と考えられていたヴィクトリア朝にあって<sup>23</sup>、マギーにとっても結婚は人生の到着点ではなかったのだ。

## 終わりに

スティーヴンとの別れを決断し、故郷に帰ったマギーを町の人々は「転落した女」として冷ややかな目で迎えた。マギーは救いを求めて聖職者であるケン博士 (Dr. Kenn) のもとへ向かう。

町での、マギーの困難な状況を案じた博士は、遠い土地で仕事を持つことを薦める。しかし、“The only thing I want is some occupation that will enable me to get my bread and be independent,” (516) と彼女が望むのは、この地で食べていけるだけの仕事を得ることであり、知らないところへ行くことを拒否する。

ここで注目したいのは、マギーが “be independent” と「自活」を意味する言葉を発している点である。家族の一部として自己抑制をし、他人のために生きることが女性の義務であると考えていたヴィクトリアン達は、女性が誰にも

依存せず自活することを恐れた<sup>24</sup>。結婚によって男性に服従することを拒否したばかりか、マギーはここで「女性の自活」というヴィクトリア時代には受け入れがたい試みを実行しようとしているのである。

このように、マギーは、作品全体を通して、彼女が男性との関係や父権を通して課せられるヴィクトリア朝の女性に求められる男性よりも劣った知性、「情熱なき女」「結婚」「依存」といった規定概念を次々と打破しようと試みている。

それでは、葛藤と選択を繰り返してきたマギーの迎える死という結末はどのように解釈されるべきなのだろうか。自らの生きる道を模索するマギーのもとへスティーヴンからの手紙が届けられる。その内容は、マギーを諦めることの出来ない彼からの結婚を求める手紙であった。

Who besides me has met that long look of love that has burnt itself into my soul, so that no other image can come there? Maggie, call me back to you! —call me back to life and goodness! (534)

彼に愛を訴えた時のマギーが、末だにスティーヴンの魂を燃えつくすように苦しめ、結婚という形で彼女を手に入れない限りその苦しみは永遠に続くのだ。

そしてマギーが、辛い試練に身を置かれた自らの運命を嘆いている時に、洪水が起きるのである。マギーの水死について、都留信夫は、マギーは「袋小路に追い詰められて、死を念願した。この願いが聞き入れられ、おまけに兄との和解までかなえられる。唐突でご都合主義的な結末」<sup>25</sup>と評する。つまり、マギーは、はっきりとした解決策が提示されぬままに不慮の死という形でその葛藤を終わらせることとなる。従順であること、服従することが当然で、女性の選択を妨げるヴィクトリア朝の文化にあって、マギーは、最後までヴィクトリア朝の女性らしさに屈するのか、あるいは自己を守るのかという選択を繰り返し、その半ばで死を迎える、スティーヴンに最後の別れを告げる前に亡くなるのだ。

袋小路に陥ったヒロインに死という結末を与えたことは、確かに「ご都合主

## ヴィクトリア朝理想の女性像へのジョージ・エリオットの挑戦

「義的」と解釈されることは避けられないが、一方でこれは最後まで「自己」の生き方を模索したマギーのような女性がヴィクトリア朝においては生きることが不可能であるということをエリオットが彼女の死を持って証明しようとし、マギーにそういった社会を永久に拒否する姿勢を取らせたことにはならないだろうか。

『ミドルマーチ』(Middlemarch) のドロシア (Dorothea) などに代表されるように、エリオットの描くヒロインの多くは社会と葛藤しながらも、自らの運命を受け入れ、最終的には当時の道徳の範疇に収められる。そんな中、マギーは特殊なヒロインであり、『フロス河』はエリオットがヴィクトリア朝の理想に対してたたきつけた挑戦状として読めるのではないだろうか。

### 注

テキストは、Eliot, George. *The Mill on the Floss*. Ed. A. S. Byatt. London: Penguin Books, 1979. を使用した。また、あらすじは内田能嗣・原公章編『あらすじで読むジョージ・エリオットの小説』大阪教育図書、2010. を参照した。

- 1 萩野 24.
- 2 内田 13–23. J. W. クロスによれば、ジョージという名前はルイスのファースト・ネームからとったものであり、エリオットという名は発音しやすい響きのよい名前だからつけられたそうである。(内田 18)
- 3 処女作 *Scenes of Clerical Life* の一作目、“Amos Barton” Chapter 5 参照。
- 4 Hardy, 58.
- 5 Byatt, 8.
- 6 Jose Angel Garcia Landa (ジョゼ・エンジェル・ガルシア・ランダ) は、プロンドのヒロインが、理想的な女性像であり、黒髪は、女性性の妨げとなり、社会をかき乱す要因と見られていたと述べる。マギーの髪の色や母親の望むような巻き毛にならない様は、静かな反抗の印とも言え、ダークなヒロインは性欲が強いだけでなく、強い意思を持ち、勇敢で自己本位だと考えられていたと書いている。(Landa, 77–80)
- 7 川本 107.
- 8 都留 106.
- 9 松田 122.
- 10 Gubar, 493–494.

- 11 Esty, 108.
- 12 松村 3.
- 13 度会 3.
- 14 度会 ii 「はじめに」『ヴィクトリア朝の性と結婚—性をめぐる26の神話』中公新書、1997.
- 15 Cominos, 159.
- 16 川本 9–11.
- 17 川本 15.
- 18 Cominos, 161.
- 19 松田 126.
- 20 Cominos, 160.
- 21 Esty, 109.
- 22 Friarman, 38.
- 23 松村 13.
- 24 Cominos, 161.
- 25 都留 109.

### Bibliography

- Auerbach, Nina. "The Power of Hunger : Demonism and Maggie Tulliver." *George Eliot's Mill on the Floss*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House P, 1988. 43–60.
- Beer, Gillian. "'The Dark Woman Triumphs': Passion in *The Mill on the Floss*." *George Eliot's Mill on the Floss*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House P, 1988. 123–141.
- Brady, Kristin. *George Eliot*. Basingstoke: Macmillan Education, 1992.
- Byatt, A. S. "Introduction." *The Mill on the Floss*. Penguin Books, 1979.
- Carroll, David. "The Mill on the Floss: Growing up in St Ogg's." *George Eliot and the Conflict of Interpretations*. Cambridge: Cambridge UP, 1992. 106–139.
- Cominos Peter T. "Innocent Femina Sensualis in Unconscious Conflict." *Suffer and Be Still: Women in the Victorian Age*. Ed. Martha Vicinus. Bloomington: Indiana UP, 1973. 155 –172.
- Eliot, George. *The Mill on the Floss*. Ed. A.S. Byatt. London: Penguin Books, 1979.
- . *Scenes of Clerical Life*. Ed. Jennifer Gribble. London: Penguin Books, 1998.
- Esty, Joshua D. "Nationhood, Adulthood, and the Ruptures of *Bildung*: Arresting Development in *The Mill on the Floss*." *The Mill on the Floss and Silas Marner*. Ed.

ヴィクトリア朝理想の女性像へのジョージ・エリオットの挑戦

- Nahem Yousaf and Andrew Maunder. Hounds Mills: Palgrave, 2002. 101–121.
- Fisher, Philip. *Making Up Society: The Novels of George Eliot*. London: University of Pittsburgh P, 1981.
- Friarman, Susan. "The Mill on the Floss, the Critics, and the Bildungsroman." *The Mill on the Floss and Silas Marner*. Ed. Nahem Yousaf and Andrew Maunder. Hounds Mills: Palgrave, 2002. 31–56.
- Gilbert, Sandra M. and Gubar, Susan. *The Madwoman in the Attic : the Woman Writer and the Nineteenth-century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1980.
- Hardy, Barbara. *Particularities: Reading in George Eliot*. Athens, Ohio: Ohio UP, 1982. 58–74.
- Landa, Jose Angel Garcia. "The Chains of Semiosis: Semiotics, Marxism, and the Female Stereotypes in *The Mill on the Floss*." *The Mill on the Floss and Silas Marner*. Ed. Nahem Yousaf and Andrew Maunder. Hounds Mills: Palgrave, 2002. 73–82
- 内田能嗣編『ヴィクトリア朝の小説—女性と結婚』英宝社、1999。
- 海老根宏・内田能嗣編『ジョージ・エリオットの時空—小説の再評価』北星堂書店、2000
- 荻野昌利「ジョージ・エリオットの生涯」海老根宏・内田能嗣編『ジョージ・エリオットの時空—小説の再評価』北星堂書店、2000. 13–23.
- 川本静子『G・エリオット—他者との絆を求めて—』冬樹社、1980.
- 『<新しい女たち>の世紀末』みすず書房、1999.
- 都留信夫「失われた幼少時代への固執—『フロス河の水車場』論」(海老根宏・内田能嗣編『ジョージ・エリオットの時空—小説の再評価』北星堂書店、2000. 101–110)
- 松田英男「『フロス河の水車場』における男と女」海老根宏・内田能嗣編『ジョージ・エリオットの時空—小説の再評価』北星堂書店、2000. 122–131
- 松村昌家編『ヴィクトリア朝小説のヒロインたち—愛と自我—』創元社、1988.
- 度会好一『ヴィクトリア朝の性と結婚—性をめぐる26の神話』中公新書、1997.

## Summary

# George Eliot's Resistance to the Victorians' Ideal Woman: Maggie Tulliver in *The Mill on the Floss*

YOSHIMURA Eri

George Eliot was a woman writer active in the Victorian period when women writers were not favorably accepted. So Eliot masked herself as a male in order to become a novelist.

*The Mill on the Floss* is often regarded as an autobiographical novel in which readers can appreciate something of Eliot's own experience through its heroine, Maggie Tulliver.

Many critics have pointed out that Maggie finally returns to "the past" represented by her brother Tom because Tom symbolizes the patriarchal system. However, feminist criticism insists that Maggie takes "unconscious" revenge on Tom at the end of the narrative, through causing their accidental deaths by drowning.

The purpose of this paper is to show that this novel can be read as Maggie's rebellion against Victorian society by comparing Maggie with the idealized images of Victorian womanhood.

First, I examine how Maggie satisfies her thirst for knowledge which was restricted for women through her relationship with Philip Wakem.

Second, I analyze Maggie's defiance toward puritanical aspirations such as innocence and the repression of sexual passion. Maggie expresses her sexual passion when she falls in love with Stephen Guest, the fiancé of her cousin Lucy, and she is labeled a "fallen woman" due to her escapade with Stephen.

Third, I discuss Maggie's refusal to marry even though marriage was

considered the safest way for women to choose at that time. Stephen proposes to Maggie on their escapade, but she rejects him searching instead for a life of independence.

In the last chapter, Maggie received the letter from Stephen who still cannot give up marrying her and again she suffers. In the middle of her suffering, she is killed by the sudden flood. This conclusion implies that she struggles with Victorian convention to the end. *The Mill on the Floss* can be read as the novel which Eliot offers a challenge to the ideal images of Victorian woman through the extraordinary behaviour of the heroine, Maggie Tulliver.